

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ホッケ

学名 *Pleurogrammus azonus*

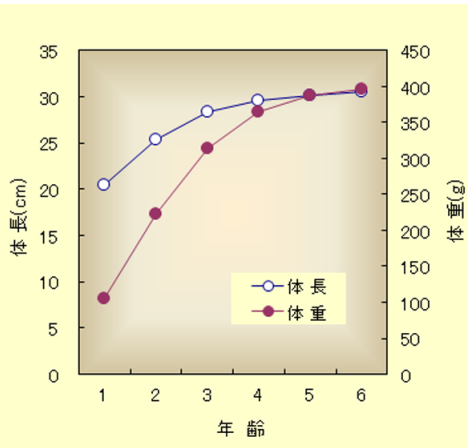
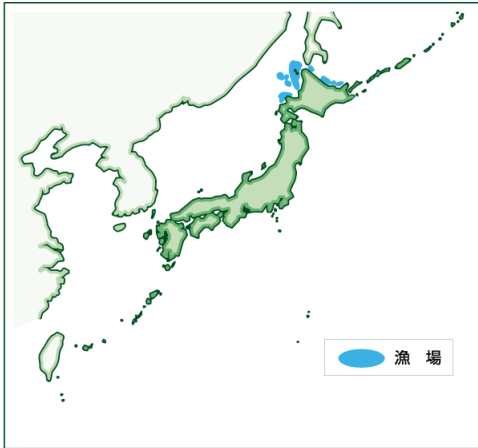
系群名 道北系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 8～9歳
成熟開始年齢: 1歳の終わり(80%)、2歳の終わり(100%)
産卵期・産卵場: 9月中旬～11月上旬、利尻・礼文島の沿岸および武蔵堆の最浅部
索餌期・索餌場: 稚魚・幼魚期に主としてオホーツク海の表層、着底後に大部分は日本海へ移動
食性: 仔魚期には主にカイアシ類、未成魚期にはヨコエビ類を多く捕食、岩礁周辺で定着生活に移行後は、魚類、魚卵、イカ類、エビ類、ヨコエビ類、オキアミ類などを捕食
捕食者: 不明

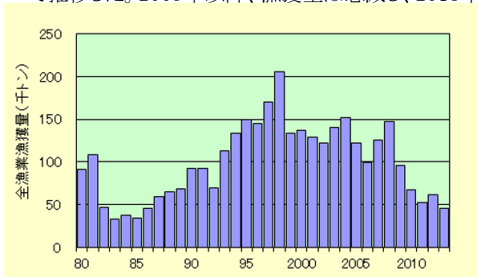


漁業の特徴

ホッケ道北系群は、沖合底びき網(沖底)、刺網、底建網、さけ定置網などによって漁獲される。漁業種類によって主漁場および漁期は異なる。漁獲量の6割程度を日本海における沖底が占めており、日本海の沿岸漁業およびオホーツク海における沖底が1～3割を占めている。

漁獲の動向

漁獲量は、1980年代前半に10万トンから3万トンに減少したが、その後増加し、1990年代前半には10万トン台まで回復した。その後も増加傾向が続き、1998年には20万トンを超えた。1999～2008年には2006年を除き12万～15万トンで推移した。2009年以降、漁獲量は急減し、2013年は前年比25%減の4.6万トンとなった。



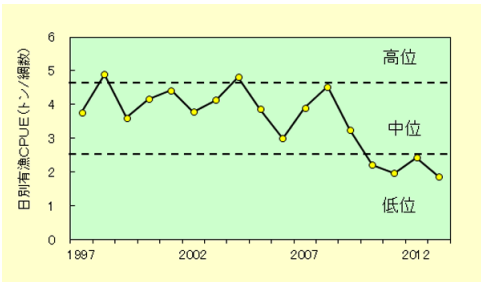
資源評価法

1997年以降の沖底有漁CPUEから資源水準を、過去5年間の同指標値の推移から資源動向を判断した。また、日本海およびオホーツク海で4～5月に行われたトロール調査のCPUEおよび沖底・定置・調査船トロール調査で得られた体長の変化についても動向判断の参考とした。

資源状態

過去17年間(1997～2013年)の沖底の有漁CPUEの平均値を50とし、35未満を低位、35以上65未満を中位、65以上を高位と設定した。2013年の有漁CPUEは1.9トン/網で26となり、資源水準は低位と判断した。過去5年間(2009～2013年)の両海域の有漁CPUE指標値の推移から、動向は減少と判断した。トロール調査のCPUEは2012～2014年に減少傾向が見られ、1歳魚以上の平均体長は近年大型化する傾向がみられる。日本海のトロール調査で得られたCPUEと体長の間には負の相関が見られ、平均体長の大型化は資源量密度が減少したことによる可能性がある。





管理方策

過去17年間の有漁CPUEから資源水準を判断すると、本資源は2010年以降低位水準にある。また、年齢別漁獲尾数から2009、2010年級群および2012年級群の豊度が低いことが示唆されており、漁獲圧を低減するなどして漁獲量を抑える必要がある。ABC算定規則2-1)に従い、ABCを算定した。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	37千トン	$07 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 0.97$	—	—
ABCTarget	29千トン	$0.8 \cdot 0.7 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 0.97$	—	—

- $\text{ABClimit} = \delta_1 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot \gamma_1$ 、 $\text{ABCTarget} = \text{ABClimit} \cdot \alpha$
- Cave3-yrは、2011－2013年の平均漁獲量
- $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ 、kは標準値の1.0、bとlは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間)
- 資源量指標値として、沖底有漁CPUEを用いた

資源評価のまとめ

- 過去17年間の沖底有漁CPUEから資源水準を、過去5年間の同指標値から資源動向を判断したところ、低位・減少であった
- 日本海トロール調査で得られたCPUEと体長には負の相関が見られる。

管理方策のまとめ

- 2009年級、2010年級、2012年級群の豊度が低いため、現状の漁獲圧の下では資源状況は低調なまま推移することが予想される
- 今後も漁獲努力量の削減を継続する必要がある
- 2012年度より沿岸・沖合の漁業者による資源回復に向けた漁獲圧3割減を目標とした自主管理が始まり、3年間継続予定

執筆者: 森田晶子・濱津友紀・船本鉄一郎

資源評価は毎年更新されます。